

英語のイディオムの語彙的な凍結度について

小原真子

1. はじめに

本論文では、英語のイディオム内部の構成要素がどの程度固定したものなのか、その語彙的な凍結度について考察する。『ロングマン現代英英辞典』[5 訂版] (2009) には、イディオムについて、次のような定義が与えられている。

- (1) idiom: a group of words that has a special meaning that is different from the ordinary meaning of each separate word. For example, ‘under the weather’ is an idiom meaning ‘ill’.

(1) で定義されているように、イディオムは構成するそれぞれの要素から、全体の意味を推測することが難しいものを指し、その表現はある一定の決まった語彙や語順で用いられることが多い。イディオムの構成要素にどの程度柔軟性が認められるかに対しては、様々な見解があり、またイディオムの種類によっても異なった性質を示すことが知られている。ここでは、新聞の見出しに現れるイディオム表現を例に、その凍結度を検証する。

新聞の見出しにおけるイディオム表現の性質を論じたものには、大久保 (2013) がある。大久保 (2013) は、新聞の見出しにおける文法的な傾向がイディオム表現に与える影響について論じたものである。見出しは簡潔な表現であることが必要であるため、一般的な英語には見られない特徴がある。一方で、イディオムは程度の差はあるが、ある一定の語彙・語順で用いることが普通である。大久保 (2013) がイディオムのグループ分けに関して言及しているのが Fraser (1970) の提案である。Fraser (1970) は各種の変形（行為名詞化、不変化詞移動、受動化など）を許すかどうかでイディオムを (2) の各レベルに分類し、この統語的な固定度の違いを凍結度階層 (frozenness hierarchy) として提唱した。参考のために各レベルの該当例も数個ずつ挙げておく。

(2) レベル6—制限なし (Unrestricted)

該当するイディオムなし

レベル5—再編成 (Reconstitution)

blow the whistle on (告発する), cast pearls before swine (豚に真珠を与える), crack the whip over (きびしく支配する), keep one's word (約束を守る),…

レベル4—取り出し (Extraction)

add up to (結局…を意味する), ask for (請う), bear down on (迫る), belong to (属する),…

レベル3—置換 (Permutation)

bring down the house (大喝采を博する), give away the show (見世物の種を明かす), keep up one's end (がんばり通す), put down one's foot (断じて許さない),…

レベル2—挿入 (Insertion)

bear witness to (証人となる), do a good turn to (助ける), give chase to (追撃する), give ground to (屈する),…

レベル1—付加 (Adjunction)

kick the bucket (死ぬ), care for (children) (世話する), aspire to (熱望する), repent of (後悔する),…

レベル0—完全凍結 (Completely Frozen)

bite off one's tongue (失言を悔いる), bleed one white (金をしほり取る), blow one's cool (興奮する), beware of (用心する),…

(2) はレベル0の全く変形を許さないイディオムから、レベル5のイディオムまで凍結度のレベル別にイディオムをグループ化したものだが、このグループ別のイディオムを大久保(2013)は新聞の見出しにおいて、それぞれイディオムの本来の形式から逸脱して使われているかどうかを中心に検証している。結果として、見出しであることの特長から、固定度の高いイディオムにも関わらず冠詞を省略した形で使われていることがあること、変形の種類と Fraser の凍結度のレベル別の違いは特に見られないことが報告されている。見出しの特殊性とイディオムの凍結度との相関関係に着目した大久保(2013)の試みは興味深いものがあるが、その際に使用した Fraser(1970)の凍結度階層に対し

ては、問題点があることが先行研究で指摘されている。たとえば、Gibbs and Gonzales (1985) で議論されているように、個々のイディオムがどのレベルに属しているのかということに対して、Fraser の個人的な判断に依拠しており、英語話者の心的辞書を反映しているものではないとの反論がある。(同様の指摘は Newmeyer (1974: 328, fn3) にも見られる。) また、(1) に挙げたいくつかの例からも明らかなように、様々な文法形式のイディオムが同じようにレベル分けしてあるなど、比較検討がしにくい面も指摘することができる。

ここでは、大久保 (2013) と同様に、新聞の見出しに現れるイディオム表現を検証するが、統語的な変形ではなく、構成要素の語彙的な凍結度を中心に調査する。すなわち、どの程度イディオムの固定的な表現が語彙の置き換えや名詞句の修飾などを許すか、という点を中心に検討する。新聞の見出しに使われているイディオムを調査することは、いくつか利点がある。まず、新聞の見出しは簡潔である一方で、象徴的な表現が好まれるため、特定の意味と結びついているイディオムが使われることが多い。また、一般にイディオムは固定した語彙・語順を取るが、新聞の見出しでは「言葉遊び」とも取れるような、逸脱を容認する例も見受けられる。一方で、新聞の記事は校正を経たものであるため、個人的な誤用と考えられるものではないと判断することができる。最後に、新聞の見出しを利用する際のもう一つの利点として、意味の確認のしやすさが挙げられる。イディオムの構成要素を別の要素で置き換えることができるかどうか検討する場合、該当の表現がイディオム本来の意味を保持しているのか、文字通りの意味となっていてイディオムとしての意味はないのかが問題となるが、新聞の見出しの場合はその記事内容から該当例の意味を確認することが比較的容易である。以上の理由から、新聞の見出しは現代英語のイディオムの語彙的な凍結度を判断するのに適した素材の一つと言えるであろう。

本論文の構成は以下の通りである。まず、セクション 2 で英字新聞の見出しに見られる文法的特徴をまとめ、セクション 3 ではイディオムの構成要素の凍結度に関しての先行研究を概観する。これらを踏まえてセクション 4 で調査結果をまとめ、考察する。なお、調査対象としたのは、*New York Times* (1980年 1月 1日以降) と *USA Today* (1987年 4月 1日以降) の二紙に現れる見出しである。

2. 英字新聞の見出し

新聞の見出しは簡潔であることが必要とされるため、一般的な英語には見られない、特殊な用法が存在する。Quirk et al. (1985) と Swan (1980) から見出しにおける文法的特徴の記載があるものをまとめると以下のようになる。

- (a) 冠詞、be 動詞など、情報量の少ない要素は省略されることが多い。
- (b) 独特の時制の使い方が存在する
 - ① 現在形は、現在の出来事や習慣を表すためだけでなく、現在完了の代わりとしても使われる¹。
 - (3) a. 見出し：Fuel Prices Rise in California
(*New York Times* 05 Apr 1989: A.24.)
 - b. 一般的：Fuel prices have risen in California.
 - ② 未来を表すために、to 不定詞の形式が使われる。
 - (4) a. 見出し：President to Seek Tax Cut for Middle Class
(*New York Times*, 03 Jan 2000: A.15.)
 - b. 一般的：The President will seek a tax cut for the middle class.
 - (5) a. 見出し：Video Gaming to Get A Slot on Network TV
(*New York Times*, 04 Dec 2006: C.8.)
 - b. 一般的：Video gaming is going to get a slot on network TV.
- (c) be 動詞の省略と関連して、受動態は過去完了形のみで表されることが多い。
 - (6) a. 見出し：Doctor, Counselor and Lawyer Held in Drug Case
(*New York Times*, 18 Oct 1987: A.50.)
 - b. 一般的：A doctor, a counselor and a lawyer were held in a drug case.

もちろん、冠詞や be 動詞の省略は絶対的なものではなく、(7) の例のように、冠詞や be 動詞が省略されていない見出しの例も存在する。

¹ 新聞の用例の下線は筆者が付したものである。

(7) a. Is There a Doctor in the House? No, Just a Mayor With Flu

(*New York Times*, 25 Dec 2004: B.4.)

b. At Least 10 Are Killed in Lebanese Fighting

(*New York Times*, 07 May 1989: A.19.)

しかしながら、普通は省略されることのない冠詞や be 動詞が省略できることが見出しの英語の特徴と言える。

このセクションでは、新聞の見出しにおける英語の文法的特徴をまとめた。特に、冠詞や be 動詞など、機能的な要素が省略されること、時制の表し方に特徴があることを見た。次節では、イディオムの構成内容の凍結度についての先行研究を概観する。

3. イディオムの構成要素の凍結度

イディオム内部の個々の構成要素は、どの程度柔軟性があるのだろうか。たとえば、他の語彙に置き換えたり、何か別の要素を挿入したりすることはできるのであるか。瀬田 (2001) が比較しているように、イディオムの構成要素の凍結度に対しては大きく分けて2つの提案がなされている。一つはイディオムの構成要素は固定したもので、まったく柔軟性を認めないものであり、もう一つはイディオムの種類にもよるが、ある程度の柔軟性を認めるものである。

たとえば、Healey (1968) はイディオムを構成する要素の柔軟性を認めていない。このことは、Healey (1968) の設定したイディオムを判断する基準に現れており、ある要素を削除したり、置き換えたりした場合でもイディオムの意味が失われない場合、当該の要素はイディオムの一部とは考えられないとしている。たとえば、*he had cold feet* (彼はおじけづいた) という表現の中で *he*, *-ed* などはイディオム全体の意味を変えずに別の要素と置き換えることができるため、イディオムの一部とは考えない。また、Healey (1968) は、イディオムの構成要素内部の自由度も認めていない。このため、*red herring* (人の注意を他にそらすもの) の一部を修飾して **very red herring** とすることはできないし、同様に *kick the bucket* (死ぬ) のようなイディオムも **kick the big bucket** のように内部の構成要素のみを修飾することはできず、修飾した場合はイディオムとしての意味が失われるとしている。イディオムの構成要素の凍結度については Weinreich (1969) でも論じられており、*shoot the breeze* (お

しゃべりする) のようなイディオムの構成要素を取り換えて fire at the breeze や shoot the wind すると、イディオムとしての意味が失われるということを例示している。

イディオム内部の構成要素の凍結度については、冠詞、複数形といった機能的な要素の観点からも指摘されている。Makkai (1972) は、kick the bucket、fly off the handle (かっとなる) などの表現が (8) のように定冠詞 the 以外を使ったり、複数形にした場合にはイディオムの意味が失われると指摘している。これらの冠詞を含むイディオムは固定した表現ということでいくつかの種類に分けることができ、この他にも、(9a) のように不定冠詞 a が必須のもの、(9b) のように複数形で必ず使われるものなどが存在する。それぞれ、決まった形式でない場合は、イディオムとしての意味は失われる。

- (8) *kick a bucket, *kick the buckets, *fly off a handle
 (9) a. pull a fast one (一杯食わず) / *pull fast ones
 b. hit the books (猛烈に勉強する) / *hit a book

イディオムの構成要素内部の柔軟性を認めない見解がある一方で、イディオムの種類やその他の要因によって、ばらつきが見られるという報告もある。たとえば、イディオムの構成要素の修飾の可能性に対しては、修飾する要素によるばらつきが見られるという Chafe (1968) の指摘がある。Chafe は hot potato (扱いにくい問題) を **boiling** hot potato とすると、イディオムの意味は失われるが、**very** hot potato はイディオムとしての意味を保持するとしている。また、kick the bucket を kick the **wooden** bucket とするとイディオムの意味は消えて文字通りの意味になるが、kick the **old** bucket, kick the **proverbial** bucket のように、old, proverbial など、ある種の修飾要素では、これらを挿入してもイディオムの意味は失われなとしている。

また、Fellbaum (1993) はイディオムの中には (10) のように、冠詞や複数形などの形式を替えてもイディオムの意味が失われないものがあると論じている。

- (10) a. Mary **had several shots at** the exam, but always failed.
 (← have a shot at: やってみる)

b. I knew all the chairmen of the committees, but I thought it too risky to **pull those strings**. (← pull the string²: 陰で糸を引く)

c. John **had a specific axe to grind** with Bob.

(← have an axe to grind: 肚に一物ある)

(Fellbaum 1993: 273, 太字は筆者)

しかし、名詞句における文法的な柔軟性はいつでも許されるものではなく、(10) の表現と酷似した表現を使っている (11) はイディオムとしての意味を失い、文字通りの解釈をされる。

(11) a. Mary **had shots** at the exam but always failed.

b. I thought it too risky to **pull the strings**.

c. Max **had the axe to grind** with Bob.

(Fellbaum 1993: 274-5, 太字は筆者)

イディオムでの冠詞の使用は一般的な新情報・旧情報の違いに準ずるとの見解をFellbaum (1993) はとっているが、(10), (11) のイディオムの解釈の保持の違いが何に起因するのか、明確には論じられていない。本論文では、新聞の見出しを素材として用いるため、標準的な英語より冠詞の消失が起きやすい。そのため、冠詞についての言及は最小限にとどめ、主として語彙の柔軟性と修飾要素の可否に焦点を置く。

修飾要素の種類による多様性だけでなく、イディオムの種類による凍結度の違いを主張しているのがNunberg (1978) である。Nunberg (1978) は、イディオム内部の構成要素が全体の意味にどの程度貢献しているかによって、イディオムを大きく二つに分類した。一つは、構成要素がイディオム全体の意味のどの部分に相当しているかが明らかな「分解可能な」(decomposable) イディオムである。もう一つは、構成要素の意味がイディオム全体の意味にどのように貢献しているか明らかではない「分解不可能な」(non-decomposable) イディオムである。

² この表現に関しては、様々な文法形式で使われることを反映して『リーダーズ英和辞典／リーダーズ・プラス』では pull (some) strings, pull the string の両方の見出し語があげられており、『ジーニアス英和辞典』では pull the [a few] strings の形が見出し語として使われている。

オムである。分解可能なイディオムは、さらに二種類に分類でき、構成要素の意味がある状況と直接結びついて理解されるものは「普通に分解可能な」(normally decomposable) イディオム、構成要素の意味が比喩的に理解されるものは「例外的に分解可能な」(abnormally decomposable) イディオムに分類される。たとえば、Nunberg (1978) が例示しているように、分解不可能な kick the bucket では、構成要素の kick も bucket もそれぞれ「死ぬ」ことのどの部分に該当しているのか明確ではないが、分解可能な pop the question 「結婚を申し込む」の場合は、pop は「(申し込みを) 口に出す」部分、question は「結婚の申し込み」にそれぞれあたると考えられる。

これらの分類は、イディオム内の名詞句の修飾の可否にも関連する。Nunberg (1978) は、kick the bucket のような分解不可能なイディオムは、ol' (= old) や proverbial のようなごく限られた修飾語句を除いては、名詞句の修飾は許されず、例外的に分解可能なイディオムも同じように、make deep tracks や ring a familiar (loud) bell のように限られた修飾要素しか許さないと主張している。これに対し、普通に分解可能なイディオムでは、(12) の用例のように、様々な修飾語句を許すと論じている。

- (12) a. John blazed a **pioneering (much-followed, important, valuable)** trail in microscopy.
 b. John had to pull some **powerful (hidden, uniquely available)** strings to get the job.

(Nunberg 1978: 129 太字は筆者)

また、分解可能かどうかは、受動文の形を持つかどうかという統語的な側面にも関係している。Nunberg (1978) によれば、分解不可能なイディオムはもちろん、例外的に分解可能なイディオムも目的語を受動文の主語として取り出して焦点化することが困難なため、受動文にすることが難しいとし、一方で普通に分解可能なイディオムは全てではないにしても、受動文にできることが多いと論じている。このように、Nunberg (1978) は、イディオムを三種類に分けた上で、普通に分解可能なイディオムと、その他二種類のイディオムとの間に違いがあると論じている。今回は統語的な現象である受動文に関しては検討の対象外とするが、語彙的な凍結度に関する Nunberg (1978) の主張の妥当性

を検証する。

Nunberg (1978) と同様の分類を用いて、構成要素の語彙の凍結度を心理言語学の立場から被験者を用いて実験したのが Gibbs et al. (1989) である。イディオムを分類する基準は同じであるものの、Gibbs et al. (1989) が使用したイディオムは Nunberg (1978) が例に挙げているものとは異なっている。その例を (13) に挙げておく。太字は Nunberg (1978) も採用している例である。

(13) a. 普通に分解可能なイディオム

pop the question (結婚を申し込む), **break the ice** (堅苦しい雰囲気をはぐす), miss the boat (好機を逸する), play the market (株の投機をする), get the picture (理解する), lose one's grip (統制できなくなる), perish the thought (そんなことは考えるな), close the books (打ち切る), button one's lip (黙る), clear the air (場の雰囲気を明るくする), cool one's heel (長いこと待たされる), open the door (門戸を開く)

b. 例外的に分解可能なイディオム

carry a torch (忠誠を尽くす), promise the moon (途方もない約束をする), spill the beans (秘密を漏らす), pass the buck (責任を転嫁する), pull the plug (打ち切る), bury the hatchet (和睦する), hold the fort (急場に対処する), grease the wheels (事を円滑に運ばせる), steal one's thunder (人を出し抜く), hit the sack (寝る), crack the whip (きびしく支配する), pay the fiddler (費用を負担する)

c. 分解不可能なイディオム

kick the bucket (死ぬ), **chew the fat** (おしゃべりする), **shoot the breeze** (おしゃべりする), raise the roof (大騒ぎをする), make the scene (やってみる), give the sack (人に肘鉄を食わせる), play the field (多方面に手を出す), cook one's goose (人の機会をだいなしにする), pack a punch (威力がある), give the bounce (首にする), speak one's mind (自分の意見を述べる), hit the sauce (大酒を飲む)

Gibbs et al. (1989) は、これらのイディオムを用いて、たとえば、普通に分解可能なイディオムの pop the question の pop を burst、question を request という類義語で置き換える場合と、例外的に分解可能なイディオムの carry a torch の

carry を hold、torch を light に置き換える場合、また分解不可能なイディオムの kick the bucket の kick を punt、bucket を pail に置き換えた場合とで、イディオムとしての意味を保持できるかどうかという点を比較している。結果としては、普通に分解可能なイディオム、例外的に分解可能なイディオムとも分解不可能なイディオムよりは語彙の柔軟性が高く、類義語による語彙の置き換えが可能な傾向にある。一方で、普通に分解可能なイディオムと例外的に分解可能なイディオムの間では、動詞要素を置き換えた場合はほとんど違いがないが、目的語名詞を他の要素で置き換えたときには、普通に分解可能なイディオムの方がイディオムとしての意味を保持しやすいという結果が報告されている。

このセクションでは、イディオムの構成要素の凍結度について、先行研究を概観した。イディオムの構成要素は全く柔軟性を欠いており、語彙を取り換えることも、内部要素を修飾することもできないとした Healey (1968)、Weinreich (1969) 等の見解もあるが、これらは、Nunberg (1978)、Gibbs et al. (1989) の分解不可能なイディオムのみを考察対象としたものと見ることができる。本論では、Gibbs et al. (1989) が用いたイディオムの分類をもとに、それらの分類の代表例がどのように新聞の見出しに現れているかを調査し、語彙的な凍結度を検証する。

4. イディオムの実例

本稿では、Gibbs et al. (1989) が実験に使用した、普通に分解可能なイディオム、例外的に分解可能なイディオム、分解不可能なイディオムのリストの中から3例ずつ調査した。このリストは、「動詞＋名詞句」の形式のものに限られており、文法形式に関する違いがないのが利点である。また、語彙の柔軟性を確かめる際の候補も Gibbs et al. (1989) に挙げられているものを使用した。イディオムの検索をする際には、その柔軟性を問題にしているため、たとえば kick the bucket を見出しで検索する際にもフレーズ検索ではなく、kick, bucketとその活用形のみを検索語句としたが、検索例が多くなる場合には、記事に関連語句が入っているものに限定した。たとえば、kick the bucket であれば、death、deadなどの語彙が本文中に含まれているものだけを対象としている。また、検索結果は代表例のみを載せており、検索結果の総数を反映するものではない。

4.1 分解不可能なイディオム

分解不可能なイディオムの中で、もっとも言及されることが多いのが *kick the bucket* 「死ぬ」であろう。実例はほとんど見当たらず、次の2例のみである。

(14) a. My Favorite Ways to Kick the Bucket

(*New York Times*, 01 Dec 2013: AR.6.)

b. Nicholson kicks ‘Bucket’ with annoying performance: Nothing touching in this trite story of dying patients

(*USA TODAY*, 24 Dec 2007: D.4.)

検索例が少ないため、確定的なことは言えないが、冠詞 *the* の有無を除いては、特に違った形式での使用例は見られない。目的語名詞句を修飾した例ももちろんない。見出しには冠詞のない形式でも使われているが、本文中には見られなかった。また、語彙の柔軟性も見られず、*kick*, *bucket* をそれぞれ *punt*, *pail* に取り換えたところ、実例は見つからなかった。

次に、*chew the fat* 「おしゃべりする」はどうであろうか。

(15) a. Web chat to chew the fat

(*USA TODAY*, 18 Dec 2001: D.10.)

b. Chew the fat with experts Dietitians discuss high-protein diets, fen- phen replacement

(*USA TODAY*, 05 Jan 2000: 10D.)

c. Employees reunite to chew fat, talk jobs Internet helps find alumni

(*USA TODAY*, 09 July 1999: 14B.)

d. Clinton, chewing the fat // He weighs in on topics both light and heavy

(*USA TODAY*, 11 Jan 1994: 04A.)

上記の例に見られるように、*chew the fat* の場合も、定冠詞の有無や動詞の活用形の違いなどを除いては、特に変化は見られない。ただし、(10b) のように、‘*fat*’ という単語を使っていることから、関連を持たせてダイエット関係の記事の見出しとして使っている例が見られた。また、目的語名詞句を修飾している例はなく、*chew*, *fat* をそれぞれ *gnaw*, *lard* と置き換えてみたが、該当例は

見つからなかった。

3つ目の例として、shoot the breeze 「おしゃべりする」を取り上げてみよう。

(16) a. A Place for Artists to Shoot the Breeze

(*New York Times*, 19 Jan 2003: 2.29.)

b. Shooting the Breeze About Wind Power

(*New York Times*, 22 Dec 2013: ST.19.)

このイディオムの場合は、総検索数は若干あったものの、形式の面では多様性は見られなかった。冠詞のない形のものではなく、動詞の活用形のみの違いだけでそれ以外には変化は見られない。念のために本文中でも確認したが、ほとんどは shoot the breeze という冠詞がある元々の形式で使われており、shoot breeze の形で冠詞なしで使われているものは数例のみであった。このイディオムの場合も目的語名詞を修飾している例はなく、shoot, breeze をそれぞれ fire, wind に置き換えた場合、イディオムの用例は見つからなかった。

以上、分解不可能なイディオムの実例を見てきたが、先行研究でも繰り返し指摘されてきた通り、分解不可能なイディオムの場合、語彙の置き換えはできず、名詞句の修飾も見られないという結果であった。この種のイディオムの凍結度の高さを示していると言えるであろう。

4.2 普通に分解可能なイディオム

次に、普通に分解可能なイディオムの場合は、構成要素の凍結度は異なるであろうか。まず、pop the question 「結婚を申し込む」について見てみよう。

(17) a. 10 great places to pop the question

(*USA TODAY*, 09 Feb 2001: D.3.)

b. Everybody loves a clever proposal Garrett pops question on set

(*USA TODAY*, 27 Aug 1998: 03D.)

c. Popping the Question Seems More Important Than Ever

(*New York Times*, 07 Oct 2001: 6.)

d. Popping Another Question: Invite Children?

(*New York Times*, 02 Mar 2008: 19.)

e. Gay Couples Pop Big Question, But the States' Reply Is the Same

(New York Times, 15 Feb 2003: A.15.)

f. Put Some Pop in the Question

(New York Times, 07 Feb 2010: ST.14.)

上の (17) に挙げた例は、すべて結婚に関連した用例である。これまでの例と同様に、(17a~c) のような、冠詞の有無や動詞の活用形のみが違う例ももちろんあるが、(17d~f) に見られるように、内部構成要素の名詞句を ‘another’ や ‘big’, ‘some’ 等の要素で修飾していたり、語順を少し変えていたりと変化が見られる。特に、(17d,e) の例は、単純に「結婚を申し込む」という元の意味ではなく、関連した何らかの問いに関する表現となっている。語彙の柔軟性に関しては、今までのイディオムと変わらず、pop, question をそれぞれ burst, request に置き換えると、実例はなかった。

分解可能なイディオムであれば、振る舞いは同じであろうか。次に break the ice 「堅苦しい雰囲気をはぐす」の例を見てみよう。

(18) a. Children Quickly Break the Ice on the Air

(New York Times, 20 Feb 1994: A.17.)

b. British Visit Breaks the Ice with China

(New York Times, 03 Sep 1991: A)

c. Breaking the Ice at a Party With the Birthday Game

(New York Times, 07 Jan 1996: 13.15.)

d. Clinton and Obuchi Break Ice but Solve No Economic Problems

(New York Times, 23 Sep 1998: 14.)

e. Laughter breaks ice

(USA TODAY, 22 Sep 1998: 08E.)

f. Gorbachev Hails Kohl in Moscow, Saying the ‘Ice Has Been Broken’

(New York Times, 25 Oct 1988: A.10.)

g. Sabbath Dinners That Break Bread, And the Ice

(New York Times, 17 Nov 1996: 8.)

h. Ice-Breaker at Starbucks: The Good Sheet

(New York Times, 08 Sep 2008: C.7.)

- i. Hot hotel rates to break winter ice // Rewards for singing travelers
(*USA TODAY*, 07 Jan 1992: 07B.)
- j. Ortega Move May Break U.S.-Nicaragua Ice
(*New York Times*, 13 Nov 1989: A.20.)

ここに挙げた (18a~e) は冠詞の有無の違い、また動詞の活用形の違いのみで、イディオムの基本の形からは外れていない。(18f~h) は文法形式の違いである。(18f) は受動文で使われている例、(18g) は等位接続で構成要素以外のものが挿入されている例である。ちなみに、sabbath は安息日のことで、記事内容はユダヤ教に関連したものであった。(18h) はイディオムを名詞化したものであるが、この形式でもイディオム本来の意味を保持している。また、(18i,j) は名詞句の修飾要素を挿入した例である。このイディオムに関しても、break, ice をそれぞれ crack, frost と置き換えてみたが、イディオムの意味を保持している例は見つからなかった。

普通に分解可能なイディオムの最後の例として、lose one's grip 「統制できなくなる」を検討してみよう。

- (19) a. Nets Lose Their Grip In the Fourth Quarter
(*New York Times*, 21 Nov 2006: 5.)
- b. TV VIEW; IS THE BBC LOSING ITS GRIP ON QUALITY?
(*New York Times*, 10 June 1990: A.31.)
- c. Cincinnati Loses Grip On Its Shot At Playoffs
(*New York Times*, 22 Dec 2003: D.1.)
- d. Japan losing grip on luxury car market
(*USA TODAY*, 27 Mar 1995: 01.B.)
- e. In Ruling on iPhones, Apple Loses a Bit of Its Grip
(*New York Times*, 27 July 2010: B.3.)
- f. AFTER THE WAR; Islamic Radicals Lose Their Tight Grip on Iran
(*New York Times*, 08 Apr 1991: A.1.)
- g. Stunned Team USA loses its golden grip
(*USA TODAY*, 22 Aug 2008: F.6.)

- h. PRO FOOTBALL: NOTEBOOK; Broncos' Elway Loses His Legendary Grip
On Last-Minute Magic
(*New York Times*, 28 Sep 1994: B.16.)
- i. Verizon faithful finally get iPhone: AT&T loses exclusive grip on smartphone
on Feb.10
(*USA TODAY*, 12 Jan 2011: B.1.)
- j. In 10.93 Seconds, America Loses 20-Year Grip on Women's 100
(*New York Times*, 22 Aug 2004: 8.1.)

このイディオムの場合は、まず、(19a,b) がイディオムの形式通りで、所有格名詞が含まれているものである。それに対し、(19c,d) は所有格名詞が含まれていないものであるが、意味の上ではそれぞれの間に特に違いは見られない。(19e) は所有格に修飾句がついたもの、(19f-h) は名詞句に修飾句が見られるものである。(19g) は多少分かりにくい見出しとなっているが、ここでの 'golden' は金メダルのことを指しており、決勝で負けたことを記事にしたものである。(19i,j) は所有格なしで、名詞句の前に修飾要素が入ったものである。以上の (19e-j) まで、何らかの形で修飾要素が挿入されているが、いずれもイディオム本来の意味を保持している。

これまで検討してきたイディオムでは、いずれも語彙の柔軟性は見られなかったが、lose one's grip に関しては、lose, grip をそれぞれ slip, handle に置き換えてみたところ、下記の通り、slip one's grip で数例、lose one's handle で 1 例、lose one's grip と同じ意味を持っていると見られる例が見つかった。

- (20) a. Democrats' Grip on the South Continues to Slip
(*New York Times*, 19 Oct 2010: A.18.)
- b. Bulls' grip on title not slipping much
(*USA TODAY*, 28 Dec 1992: 10C.)
- c. FOR MILITARY IN BRAZIL, A SLIPPING GRIP
(*New York Times*, 08 July 1984: A.2.)
- d. The briefcase loses its handle on public ; Americans are more attached to their all-purpose tote bags
(*USA TODAY*, 02 Oct 2002: D.08.)

今回調査した中では、このイディオムだけが語彙の柔軟性が比較的あったが、これは **grip** という単語そのものに「統制」という意味が強く結びついており、比較的いろいろな動詞と使われやすいからであろう。また (20d) は **briefcase** の話なので、**handle** を「統制」と「鞆の取っ手」の意味とを掛けて使っていると考えられる。

ここまで見てきたように、文法的な特徴、すなわち冠詞の有無や動詞の活用形の種類などは、分解不可能なイディオムと普通に分解可能なイディオムでの違いは見られなかった。これは、新聞の見出しの特徴がイディオムの種類に関わらず働くからだと考えられる。語彙の置き換えに関しても特に違いは見られなかったが、**lose one's grip** のみが柔軟性の高さを示した。一方で、名詞句の修飾の有無に関しては、明確な傾向の違いが見られ、普通に分解可能なイディオムは名詞句の修飾を許す傾向にあるのに対して、分解不可能なイディオムの方は名詞句の修飾例が全く見られなかった。次に、分解可能なイディオムの中でも構成要素が比喩的に何かを指示している、例外的に分解可能なイディオムではどうであろうか。次のセクションで実例を検証しよう。

4.3 例外的に分解可能なイディオム

前節で調査した普通に分解可能なイディオムは内部の構成要素を修飾する例が散見された。例外的に分解可能なイディオムの場合には、どうであろうか。まず、**carry a torch** 「忠誠を尽くす」の実例を見てみよう。

- (21) a. **Why I Carry a Torch For the Modern Library**
 (*New York Times*, 06 Dec 1992: A.42.)
- b. **Carrying a Torch for Pure Academic Ballet**
 (*New York Times*, 23 Apr 2013: C.3.)
- c. **Needed: A leader to carry the torch**
 (*USA TODAY*, 26 Jan 1988: 08A.)
- d. **Kidd carrying torch for Cousy**³
 (*USA TODAY*, 18 May 2004: C.10.)

³ Kidd, Cousy ともに人名であり、記事はバスケットボールに関するものである。

- e. The ‘Older’ Generation Carries and Guards the Torch
(*New York Times*, 08 Feb 2001: D.3.)
- f. Mondale, others can carry Wellstone torch⁴
(*USA TODAY*, 30 Oct 2002: A.10.)
- g. Defying Odds in Mississippi, Black Carries G.O.P. Torch⁵
(*New York Times*, 24 June 1996: 1.)
- h. Carrying AIDS torch; Widow gives up privacy to help victims
(*USA TODAY*, 08 Mar 1988: 02A.)

(21a~d) が冠詞の種類や有無、動詞の活用形などが違うものである。carry a torch に関しては、torch が「オリンピックの聖火」などの意味にもなるため、冠詞がなく、かつ明確にイディオムとして使われている例はほとんど見当たらなかった。(21e) はイディオムの動詞が他の動詞と等位接続している例、(21f-h) は名詞句を修飾している例である。(21f-h) では、それぞれ「忠誠を尽くす」対象を修飾要素に取っている。語彙の自由度に関しては、carry, torch をそれぞれ hold, flashlight に置き換えてみたが、hold a torch の次の用例があったのみである。

- (22) Olympics can’t hold a torch to baseball
(*USA TODAY*, 22 July 1996: 09.B.)

以上のことから、carry a torch は語彙の自由度は高くないが、構成要素の凍結度は低いと言えるであろう。

次に、spill the beans 「秘密を漏らす」の実例を検証しよう。

- (23) a. Helping Workers Who Spill The Beans
(*New York Times*, 19 Jan 2003: 3.2.)
- b. Spilling The Beans On a Passion
(*New York Times*, 17 Jan 1999: 11.)

⁴ Mondale, Wellstone とも政治家である。

⁵ G.O.P. は共和党のことを指している。

- c. Greenspan unlikely to spill beans Fed chief's speech today won't tip hand
(*USA TODAY*, 20 July 2000: B.3.)
- d. Frederick Barthelme's Spilled Bean
(*New York Times*, 05 June 1988: A.56.)
- e. Spilling Each and Every Bean
(*New York Times*, 08 June 2005: A.19.)
- f. Rowling Spills the Potter Beans
(*New York Times*, 27 July 2007: 3.)
- g. Spilling more royal beans
(*USA TODAY*, 16 Jan 1995: 02.D.)

このイディオムが使われている用例は比較的少なかった。(23a~c) が冠詞の有無、動詞の活用形のみが違う例である。(23d) は文法的な柔軟性を表す例で、動詞が分詞として名詞句の修飾要素として使われている。(23e~g) は名詞句を修飾する要素がイディオムの内部に見られる例である。(23e) は秘密の数について言及している例であり、(23f,g) はそれぞれハリー・ポッター、イギリスのロイヤル・ファミリーに関しての秘密を扱っている記事で、beans が何らかの「秘密」にあたっていることが分かる。語彙の柔軟性に関しては、spill, beans をそれぞれ drop, peas で置き換えてみたが、検索例はなかった。

最後に steal one's thunder 「人の考えを横取りする、人を出し抜く」の実例を見てみよう。

- (24) a. Swedish Nationalists in Struggling City See Rival Parties Steal Their Thunder
(*New York Times*, 04 Aug 2011: A.4.)
- b. G.O.P. Steals Thunder
(*New York Times*, 28 June 2003: A.1.)
- c. Stealing Each Other's Thunder
(*New York Times*, 02 Apr 2000: 2.)
- d. Osaka Journal; Impatient City's Mission: Steal Tokyo's Thunder
(*New York Times*, 09 Dec 1989: 1.4.)
- e. Rangers steal a little of Cowboys' thunder
(*USA TODAY*, 24 Oct 2011: C.4.)

f. War coverage steals some of Academy Awards' thunder; Viewership falls more than 20%

(*USA TODAY*, 25 Mar 2003: D.01.)

g. Nike steals Adidas' World Cup thunder

(*USA TODAY*, 21 June 2010: C.3.)

h. Clinton stealing Bush's foreign-policy thunder

(*USA TODAY*, 11 Aug 1992: 09A.)

このイディオムの場合、もともとの形式が *steal one's thunder* であるが、(24a) のように所有格名詞を代名詞で示している場合だけでなく、*one's* の部分がない (24b) の形も見出しとしては見られる。(24c,d) は所有の部分で代名詞や名詞句ではっきりと表現したものである。(24e,f) も同様の例であるが、*one's* の部分に対して、*a little of, some of* などの表現で、量を限定している。(24g,h) は *one's* 表現の後に名詞句が加わった表現であり、何の「功績」であるのかが示されている。語彙の自由度に関しては、*steal, thunder* をそれぞれ *rob, roar* と置き換えてみたが、元のイディオムの意味と同じ検索例はなかった。

以上、検討してきたように、例外的に分解可能なイディオムの場合も、冠詞の有無、動詞の活用形などに関して、他の種類のイディオムとの違いは見られなかった。また、語彙の柔軟性も見られず、イディオム本来の語彙を類義語で置き換えても本来のイディオムの意味を保持している、という用例はほとんど見られなかった。これに対し、イディオム内部の構成要素の修飾の可能性に関しては、いくつか用例が見られた。これは、*torch* は「忠誠心」、*beans* は「秘密」、*thunder* は「功績」など、比喩的ではあるが、目的語名詞句が具体的に指示しているものがあるため、その指示内容を修飾することが可能だからであろう。

今回は、分解可能性が違うイディオムをそれぞれのグループから3つずつ調査し、ある一定の傾向が見られたが、必ずしもグループ内で同じ結果が出るとは限らない。たとえば、例外的に分解可能なイディオムに分類されている *bury the hatchet* 「和睦する」を見てみよう。

(25) a. Jackson, Clinton try to bury the hatchet

(*USA TODAY*, 23 Nov 1992: 07A.)

- b. Burying the Hatchet, If Only for a Day
(*New York Times*, 15 Jan 2006: 3.)
- c. Kerry, Karzai bury hatchet at meeting in Kabul
(*USA TODAY*, 26 Mar 2013: A.6.)
- d. NEW YORK; G.O.P. Leaders Bury Hatchets, But Shallowly
(*New York Times*, 08 Sep 1994: B.6.)
- e. Hatchet isn't buried, but hole's being dug: Apple, Samsung show signs of patent deal
(*USA TODAY*, 23 July 2013: B.1.)
- f. Hatchets Seem Buried In Jets' Weight Room
(*New York Times*, 15 Apr 1997: 16.)
- g. The Bones Are Buried, but the Hatchets Aren't
(*New York Times*, 30 Dec 1992: A4.)
- h. 'No hatchet to bury'
(*USA TODAY*, 01 Dec 1988: 01a.)

このイディオムでは、これまでの例と同様、(25a~c)に見られるように、冠詞の有無や動詞の活用面での違いがあるほか、(25d)にあるように、構成要素を複数形にした例も存在した。また、文法的な柔軟性は高く、(25e~g)にあるように、受動文にした例も見られた。しかし、本稿で着目した目的語名詞の修飾に関しては、否定を付した(25h)の1例のみで、他の例は見られなかった。

このように、同じグループに属するとされるイディオムでも内部の構成要素の修飾に関しては違いを見せることがあり、より網羅的な調査を今後も続ける必要があるが、現段階では、分解不可能なイディオムは構成要素の修飾が許されず、分解可能なイディオムは構成要素の修飾を許すと言うことができるであろう。このことに関しては Nunberg (1978) にも同様の主張がなされているが、例外的に分解可能なイディオムに関して、多少の制限があると主張する Nunberg (1978) に対し、新聞の見出しのデータからは、普通に分解可能なイディオムと例外的に分解可能なイディオムとの間に大きな違いは認められなかった。

5. おわりに

本論文では、英語の「動詞＋目的語」の形式のイディオム表現を分解可能性の観点から分類したものが、英字新聞の見出しにどのように現れるのか、グループ間での違いはあるのかという観点から調査した。冠詞の有無や動詞の活用形の現れ方に関しては、グループ間で違いは見られず、イディオムの構成要素の分解可能性とその文法形式上の現れ方には相関関係はないようであった。この結果は大久保（2013）の結果と重なるものである。一般的にイディオムは冠詞なども含めて固定して使われることが多いが、見出しという環境では、見出しの特殊性の方が優先されることもあるようである。

また、語彙の凍結度に関しては、語彙の置き換えと構成要素の修飾の可能性の2点から検討した。語彙の置き換えに関してもグループ間での違いは見られず、ほとんどのイディオムでは類義語で置き換えた例は見られなかった。唯一 *lose one's grip* だけが語彙の置き換えを比較的容認するイディオムであった。Gibbs et al. (1989) では、分解可能なイディオムの方が語彙の置き換えを許す傾向にあると報告されているが、この結果は、たとえ母語話者がイディオムとしての意味を保持できると判断しても、実際にイディオムを使用する際には固定的な表現が好まれ、ほとんど語彙の置き換えは見られないということを示している。語彙の置き換えの可能性については、さらに調査を進める必要があるが、個々のイディオムに固有のものである可能性も高い。

これに対して、構成要素の修飾の可能性については、グループ間で明確な違いが見られた。分解不可能なイディオムの場合は、目的語名詞句を修飾した例が全く見られないのに対し、分解可能なイディオムでは、目的語名詞句の修飾例がいくつも見られた。また、分解可能なイディオムの中でも、目的語名詞句が具体的な指示物と結びついている普通に分解可能なイディオムと、比喩的に指示物と結びついている例外的に分解可能なイディオムがあるが、Nunberg (1978) の主張とは異なり、今回の調査では、どちらのタイプでも修飾要素に関して違いは見られなかった。限られた検索例であることから、確定的なことは言えないが、同じ二紙を調査した中から、イディオムの分解可能性による違いが出ていることは重要である。この修飾の可能性の違いは、分解可能なイディオムでは、具体的なものであれ、比喩的なものであれ、何らかの指示物と名詞句が結びついているが、分解不可能なイディオムの場合には、目的語名詞句は何も指示物がないため、修飾ができないということに起因するのである

う⁶。

本稿では、分解可能性に関して、各グループ数例にしぼって、性質の違いを検討したが、イディオム個々の性質に起因する違いを捨象するためには、より広範な調査が必要となる。今後の課題としたい。

参考文献

- Chafe, Wallace L. (1968) "Idiomaticity as an Anomaly in the Chomskyan Paradigm," *Foundations of Language* 4, 107-127.
- Fellbaum, Christiane (1993) "The Determiner in English Idioms," *Idioms: Processing, Structure, and Interpretation*, ed. by Cristina Cacciari and Patrizia Tabossi, 271-295, Lawrence Erlbaum Associates, New Jersey.
- Fraser, Bruce (1970) "Idioms within a Transformational Grammar," *Foundations of Language* 6, 22-42.
- Gibbs, Raymond W., Jr. and Gonzales, Gayle P. (1985) "Syntactic Frozenness in Processing and Remembering Idioms," *Cognition* 20, 243-259.
- Gibbs, Raymond W., Jr., Nandini P. Nayak, John L. Bolton and Melissa E. Keppel (1989) "Speaker's Assumptions about the Lexical Flexibility of Idioms," *Memory & Cognition* 17, 58-68.
- Healey, Alan (1968) "English Idioms," *Kivung* (Journal of the Linguistic Society of the University of Papua New Guinea) 1, 71-108.
- Makkai, Adam (1972) *Idiom Structure in English*, Mouton, The Hague.
- Newmeyer, Frederick J. (1974) "The Regularity of Idiom Behavior," *Lingua* 34, 327-342.
- Nunberg, Geoffrey D. (1978) *The Pragmatics of Reference*, Indiana University Linguistics Club, Indiana.
- 大久保薫 (2013) 『英字新聞の見出しにおける成句の変形可能性について』神戸市外国語大学外国語学部・英米学科卒業論文。
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- 瀬田幸人 (2001) 「成句 (idiom)」中島平三編 『[最新] 英語構文事典』 677-

⁶ Nunberg (1978) にも同様の指摘が見られる。

692, 大修館書店.

Swan, Michael (1980) *Practical English Usage*, Oxford University Press, Oxford.

Weinreich, Uriel (1969) "Problems in the Analysis of Idioms," *Substance and Structure of Language*, ed. by Jaan Puhvel, 23-81, University of California Press, Berkeley.

辞書

『ジーニアス英和大辞典』（2001-2010）大修館書店.

『ロングマン現代英英辞典』[5訂版]（2009）Pearson Education.

『リーダーズ英和辞典』[第2版]（1999, 2008）研究社.

『リーダーズ・プラス』（1994, 2008）研究社.

新聞

New York Times: ProQuest で1980.1-2014.9を検索

USA Today: ProQuest で1987.4-2014.9を検索